

JACET 関西支部 20 周年に際して

大 浦 幸 男
(初代関西支部長)



今年は JACET 関西支部創立 20 周年になる。支部の発会式があったのは 1972 年（昭和 47 年）6 月 24 日だから、丁度 20 年になるわけだ。そこで、20 周年記念誌を出したいので、発足当時の苦勞話など、思い出話と、将来への希望を書くようにという、大谷支部長からの依頼があった。しかし、苦勞話というのはほとんどない。むしろ、関西支部は終始和気藹々にして、春風駘蕩であった、というのが私の実感である。

だが、とにかく支部創立当時のことを少し記しておこう。関西支部創立を私と多田稔氏に最初に要望したのは現 JACET 会長の小池生夫氏で、昭和 45 年のことだったと記憶する。その後、故小川芳男会長からも、東京で会ったとき熱心に口説かれた。そこで、私は、多田さんと相談して、翌 46 年 2 月 21 日に京都の御車会館において、関西支部設立の準備会をやった。そのとき、春秋に支部大会を開くことが決まったので、3 ヶ月後の 5 月 8 日に取りあえず「研究会」として開くことになった。当日は京都の平安女学院で開催したが、小川会長がわざわざ入洛し、挨拶された。引きつづき第 2 回、第 3 回の研究会がもたれ、第 4 回の研究会は同年 12 月 11 日に大阪の関西大学天六校舎で開かれた。以上で大体軌道に乗ったので、翌 47 年 6 月 24 日に発会式を開いた次第である。

圖らずも私が初代の支部長に選出され、約 10 年間支部の運営をすることになった。関西支部の範囲は京阪神を中心として、西は岡山あたりまでと、私は考えたので、春秋の大会は、京都だけでなく、大阪・神戸・奈良など、各地で順番にやってもらうことにした。その後支部は順調に発展したが、その間小川芳男会長は関西支部に強い熱意を示され、春秋の大会には必ず出席された。

そのうち、会長始め東京の人たちは、全国大会を関西でもやって欲しいと強く要望された。そして、早くも支部開設の 2 年後の昭和 49 年 10 月 6 日に京都の平安女学院で JACET の全国大会が開かれた。また、その頃は、支部は関西以外にはなかったのもので、その後はほとんど隔年に東京と関西で全国大会が開かれることになった。

と同時に、関西支部にも独自の予算執行が認められたが、それについての本部との折衝はすべて多田稔氏を煩わした。また、支部に運営委員会を置き、支部の行事はすべて運営委員会で討議して決定したが、運営の中心となったのは多田さんであった。私は改めて同氏に深い謝意を表したい。同時にまた、終始暖かい庇護と激励を与えられた故小川会長に

も厚く御礼申したい。

以上が、私の関西支部発足ごろの思い出である。しかし、その後十数年の間に、私はしだいに「英語教育」から遠ざかっていった。というのは、昭和 53 年京大退官後は、ノートルダム女子大、就実女子大に迎えられたが、こういう私学では文学部の英文学教授として勤めることになったからである。また、昭和 53 年には日本イエイツ協会会長、同 55 年には日本フェノロサ学会会長となったので、文学関係が多忙となり、昭和 56 年には関西支部長を辞めさせてもらうことになった。

元来、私は文学畑の人間であり、20 世紀の英詩、特にイエイツを専攻してきたが、その私は何ゆえ英語教育に関心を持ったか、を次に語りたい。それは結局、日本の英語教育は偏していると感じたからである。つまり、大学の英文科を出ても、さっぱり英語が話せないからである。私は旧制三高を出たが、そこでも授業はもっぱら英文の精読にあった。英語を通じて西洋文化を吸収するという教養主義で授業が行なわれていたのである。

そういう授業には、もちろんそれなりの魅力があり、結局は私を英文学へと誘うことになった。しかしその一方、外国人とも自由に話せるようになりたいという願いは、私には早くからあった。現在の学生も、このように「読める」だけでなく、「聴き」「話す」という願望は強いであろう。また、近年国際交流が深まるにつれ、正確に英文を「書きたい」と願っているであろう。近年 JACET において英語教育の学問的研究が盛んに行なわれるようになったのは、誠に慶賀すべきことだ。しかし同時に、つねに初心に返って、その研究をいかに実際の教育に適用するかを、真剣に考えて頂きたい。というのは、JACET の究極の目標は、日本の大学における英語教育の改善であると、私は終始考えていたからである。